

企業

東北の皆で頑張っていかなきゃ

栗石町

鎌田 徹 小岩井農牧株式会社

取材日 2013.07.09

小岩井農場の品質保証部部长。1891年、火山灰地の荒野に1本の木を植える事から始まった日本最大級の民間総合農場である小岩井農場は、「環境保全・持続型・循環型」を基本とし「安全・安心・素性明らかプラス質の高さ」をすべての基礎に生み出す商品・サービス・情報などを通して社会に貢献している。

3月11日 14時46分

翌日、沿岸部に出張する予定があり、屋外で車両を点検している時に地震が発生した。屋外にいたせいかわらぬと非常に長い揺れが続いていたが、ゆっくりとした横揺れだったので、この地域に大きな被害を招く揺れとは感じなかった。学生時代を仙台で過ごし、大学2年生の時に1978年の宮城県沖地震を経験した。友人が自転車で転倒し、手当てのために病院に付き添った。診療が終わった直後に地震が来た。その時の揺れは尋常ではなかった。突き上げるような縦揺れを感じ石灯籠が倒れて、吊り下げ式の照明が天井にぶつかるほどだった。窓ガラスが割れ、塀が倒れた。

その時と比較すると、立ってられないような激しい揺れではなく、非常に長い揺れが続いたので、震源地は遠いのだろうと判断していた。直接的な被害としては、農場内の建物で天井のはがれなどはあったが、私のいた事務所は書類などが落下した程度で大きな被害はなかった。

即座に停電になり、PCが使用不可能になるなど通常の業務はできなくなった。停電はしたもの、ラジオで災害に関する情報は入手できており、ここでは津波に関する情報も流れていた。また、携帯電話のワンセグを見ると、仙台空港近くの津波の映像が映し出されていた。その映像を見て、ただ事ではないと初めて気がついた。農場内はワンセグの電波状況が悪いため、窓際にくっついて食い入るように映像を見た。

その後、社内に対策本部が立ち上げられ、従業員の安否確認、動物への対策、翌日以降のお客様の受け入れ対応などを検討すると共に、停電したため発電機の確保やお取引先様の被災状況の把握にあたる事となった。特に動物を扱う部署の従業員の多くは帰宅できない状況となった。

地震の後、家族の安否確認のためすぐに自宅に電話をかけたが、なかなかつながらなかった。やっと電話がつながり、家族の無事が確認できた。娘が仙台の大学に通っていたのだが、ちょうど春休



みで帰省中で、中学生の息子もたまたま家にいたので、安否の確認に手間取るなどの心配をせずに済んだ。

電気が復旧するまで

停電した2日間は、会社としても正念場だった。乳牛は1日に朝夕2回搾乳する。地震の時は夕方の搾乳の準備をしているところだった。停電によりコンプレッサーが機能せず、牛の乳房に付けるミルクカーが動作しなくなった。ずっと昔であれば手搾りだったのだが、800頭近くいるため手搾りでは対応できない。乳業工場も停電に見舞われており、搾った原乳を受け入れる事ができないので、それは結果的に廃棄する事になるのだが、廃棄による損失はもとより牛の体調が重要である。乳を搾ってあげないと、牛の場合は乳房炎を起こしてしまう。乳房炎にかかると生産性は著しく低下し、回復には長期間を要するので、特に注意が必要だ。所有している発電機では小さくて間に合わず、日頃からお付き合いのあるイベント業者から大型の発電機を借りる事で、何とか乗り切るといった状況だった。

また、鶏も非常に繊細な動物で、大きなストレスを受けると鶏同士が怖がって集まり、圧死状態を引き起こしてしまう。パニックにならないようにデリケートな管理が必要であった。

灯油や重油は若干の在庫があったのでその点では良かったのだが、燃料が切れれば発電機は使えなくなる。人間は何とか食べ物やガソリンを探して動けるが、動物を放置する事はできないので、動物を管理する部門は大変気を遣っていた。

雪はちらついていたが、3月だったので凍えるほどの寒さではなかった事が幸いだった。自宅は電気さえ復旧すれば大丈夫だろうと考えていたし、当初発電所の停止による電力不足などは思い浮かばなかったので、電気はすぐに復旧するだろうと考えていた。地震発生の翌日に盛岡市内の電力供給が復旧したので、いくら遅くても3日目にはこの地域の電気も復旧するのではないかと予想していた。実際、農場周辺の電気は2日目の午前中に復旧した。

もっとも電力の復旧以外は、まったく先が見えない状態だった。家庭も会社もまだまだ落ち着いた状況にはなっていなかったし、津波の被害がひどい地域の事も心配で不安だった。停電が復旧するまでは、会社で発電機を使わずずっとテレビを見る事ができたので、悲惨な状況を見て、これから一体どうなるのだろう、この状況がいつまで続くのだろうと不安な気持ちになっていた。

自然や動物と向き合う仕事

エサの手配については2ヶ月ほど大変な時期が続いた。牛や鶏のエサを作っている会社が石巻などの被災地域にあり、飼料の確保が困難となった。特にこだわったエサを使っていると、「非常時のため、特殊な配合のエサは対応が困難」と飼料メーカーから言われる事もあり、調達が大変だったという。飼料メーカー自身が大きな被害を受けていたのだからそれもそのはずだ。この状況下でも最大限の協力をいただき、北海道や愛知などの遠隔地の工場から運んでもらって必要量を確保した。通常の農場運営に回復するまでには相当時間がかかったと思う。

3月いっぱい「まきば園」は休園したが、グリーンシーズン（4月中旬～）はオープンできた。ご来園者の動向は壊滅的な状況ではなかったが、レジャーに関しては自粛ムードに覆われていたように思う。

5月に入ると、また新たな事態が発生した。「県内の牧草から放射性物質が検出された」と岩手県農政部から飼料に関する注意喚起と利用自粛要請が出たのだ。小岩井農場内は粗飼料用として牧草地を拡大に抱えており、これをエサとして給与できないとなると大変である。種々の調査の結果、この地域の利用自粛は徐々に解除され、牧草の利用に関しては大きな影響は受けなかったが、風評被害は大きかった。放射性物質に関するお問い合



岩手県雫石町 牧草の収穫風景

わせなどは私の部署が対応しているので、一時は「そちらの牛乳や卵は大丈夫か」というお問い合わせの対応に追われた。

また、一般の方から「福島県の牛などの動物がかわいそうなので、何とかそちらの農場で受け入れられないか」とのお問い合わせもいただいた。同業者の方は、通常であっても防疫衛生上の問題や飼料の確保の問題で簡単には動物を受け入れられない状況であると事情をよく知っていらっしゃるのだが、一般の方はテレビなどで報道されていた福島の酪農家の現状に相当衝撃を受けたのだろう。お問い合わせに対しては、お気持ちはよく分かるが、会社としては受け入れる事ができない事情を説明するしかなかった。

日常で自分にできる事

岩手県山田町の沿岸部に親戚がいて、お米を送ったり、ホタテやワカメをお返しに頂いたりというお付き合いをしていた。テレビで沿岸部の津波の映像を目にしているの、一体どうなってしまったのだろうと心配になり、ずっと電話をかけ続けていた。結局こちらからの電話はつながらなかったが、地震から2日目くらいに親戚伝いに家屋の被害もなく無事である事が分かった。宅配業者は復旧していたので、すぐに米や野菜をかき集めて送った。

いつか絶対に行かなければと思っていたが、こちらもなかなか落ち着かず、ようやく少し落ち着いてきた2011年7月に様子を見に行く事ができた。妻と一緒に盛岡から宮古、山田町、釜石、花巻のルートで回った。瓦礫は山積みになっていたのだが、あまりにもきれいに片づきすぎていて、本当に何もない、何か感情を通り越しているような感覚だった。喪失感というのか、悲しいのではなく、正直、呆然としていた。親戚の家は海岸から

200m程度で、海が見える位置にある。家の4軒前まで津波が到達したそうだが、山のちょっとした高台になっている場所に家があったので助かったようだ。しばらくは行政がサポートする民間の避難所扱いになっていて、支援物資が届く拠点にもなっていたらしい。実際に行ってみると、津波に流された家屋は片づけられており、以前は家の間から少ししか見えなかった海が見渡せるようになってしまっていた。

同じ岩手県にいても、もっと自分達よりも大変な状況にある方々のために、何もできない無力感を感じた。内陸部でも被害はあったが、人的被害は多くはなかったし、沿岸部ではもっと大変な被害を受けているので、「内陸部の我々よりももっと困っている方々のために何か」という気持ちが皆にあったと思う。しかし、何かしたい気持ちはあっても、ガソリンは不足しており、帰って来られるかどうか分からない状況下から、行こうと思っても行けなかった。

私は岩手県花巻市の出身で、大学は仙台、仙台から戻ってきてずっと地元岩手、東北に住んでいる。復興にあたって現在思う事は「東北の皆で頑張っていかなきゃいけないんじゃないか」という事だ。私の中では「東北一体で」という気持ちが震災後ますます大きくなっている。個人として大それた事はできないし、直接何かできるわけでもない。だから、これを機会に改めて東北各地に出かけようと思っている。



岩手県雫石町 小岩井農場の1本桜

日頃からつながりを大事に

震災を経験して、普段意識しているとは言えない多くの事について改めて考えさせられた。エネルギーの問題、家族やたまたま山田町に住んでいた親戚の事。人とのつながりは何かがあってからどうにかしようとしてもどうしようもないし、急に相手がいなくなってしまう事もある。震災がなければ、何気なくやり過ごしていたであろう日常の大事さに気づく事もなかっただろう。天災、特に地震は突然訪れる。そうした事を考えると、日頃から感謝の気持ちを忘れない事、それを伝える事、そしてつながりを大事にしておかなければいけないと改めて思う。



震災時、停電により約800頭の乳牛の搾乳の対応に追われた（EPO東北スタッフ撮影）



1903年建設 国の登録有形文化財である本部事務所（EPO東北スタッフ撮影）



撮影：2011.3.20 岩手県盛岡市 被災した事務所（大立目 勇次さん提供）



緊急時に対応できる強さを発揮した薪ストーブ（大立目 勇次さん提供）